



韓国で初の放鳥

兵庫県立コウノトリの郷公園
園長 山岸 哲



我が国では、コウノトリの放鳥 10 周年記念セレモニーを 10 月 18 日に挙行するが、お隣の韓国では、去る 9 月 3 日に礼山郡の「礼山コウノトリ公園」で、8 羽のコウノトリが初放鳥された。

この記念すべき式典に、私と江崎統括研究部長が招かれて訪韓したが、郷公園からは内藤、船越、西井、田上の 4 氏も参加された。お招きに預かった大きな理由は、放鳥された鳥の中に郷公園から譲渡された鳥の子孫が含まれていたことや、これまで鳥たちを飼育増殖してきた韓国教員大学と郷公園が共同研究の覚書を交わしていることがあげられる。

放たれたコウノトリたちは、いずれも元気に大空に飛び立ったが、その瞬間の「オーッ」という 3000 人を超す見物人の歓声は、まさに 10 年前の豊岡でのあの日の歓声を思い出させるものがあった。鳥たちは現在、韓国中を広く飛び回っているが、いずれは

日本へやって来る日も近いことだろう。そして、日韓の鳥のつがい が形成されて東アジア個体群の確立に役立てばと願う。

放鳥式典の前日には、礼山文化会館で礼山郡と韓国教員大学の共催で「第 1 回朝鮮半島コウノトリ保全のための国際フォーラム」が開催され、江崎統括研究部長が「10 年間のコウノトリの生態と社会」を学術面から講演し、私はシンポジウムで、「明日が新しい苦難の出発点になる」「研究の力と地域の力の連携が必要である」旨のお話をさせていただいた。

このフォーラムと放鳥式典を通じて印象的だったのは、地元の一般の方がお一人も登壇しなかったり、テープカットに加わらなかったことである。なんとなく「政治ショー」を見せられている感じがして、そこだけが残念なことだった。

コウノトリの個体数 (2015.9.26 時点)

飼育コウノトリ

施設・拠点名	オス	メス	不明	計
県立コウノトリの郷公園	26	29	0	55
附属飼育施設コウノトリ保護増殖センター	18	17	2	37
養父市八鹿町伊佐地区放鳥拠点	1	1	0	2
朝来市山東町三保地区放鳥拠点	1	1	0	2
計	46	48	2	96

野外コウノトリ

カテゴリー	オス	メス	計
リリース	10	11	21
野外巣立ち	22	38	60
野生	0	1	1
計	32	50	82



コウノトリの翼に思いをこめて

兵庫県知事
井戸 敏三

秋篠宮同妃両殿下により放たれたコウノトリが、悠然と大空を舞った日から10年が経ちました。今では野外で生息するコウノトリは80羽を超え、豊岡ではコウノトリのいる風景がごく身近なものになりました。コウノトリは兵庫県内をはじめ、全国各地へ飛来し、なかには海を越え韓国で長期滞在するものもいるなど、着実に生息の範囲を広げています。

放鳥から10年を迎えた今こそ、本格的な野生復帰に向けた新たなステージへと飛躍するときではないでしょうか。まだまだ、各地に飛来したコウノトリが、それぞれの地で繁殖するまでには至っていません。かつてのように、コウノトリと人が共に暮らせる社会を実現するためには、飛び立ったコウノトリたちが、『住み暮らし、自ら種を繋いでいける豊かな自然環境』を全国・世界へと広げていくことが重要です。

コウノトリは、魚をはじめ多様な生き物を餌とし、一年を通じて豊かな自然の中で生息します。コウノトリが健やかに舞う環境は、多様な生命を育む環境である必要があり、それは人にとっても住みやすい環境にほかなりません。

現在イタリアで開催されている「ミラノ国際博覧会」に出展する日本

館のシンボルに「コウノトリ」が採用されているのも、コウノトリこそ、日本館のテーマ「Harmonious Diversity – 共存する多様性 –」、つまり、『人と自然との共生』を象徴する生き物であるからです。

本県では、コウノトリ野生復帰プロジェクトの開始に合わせ、環境に配慮した農業のあり方を模索してきました。今では、「コウノトリ育むお米」をはじめ、農薬や化学肥料に頼らずに多様な生物の生命を育む「環境創造型農業」が年々広がりを見せています。豊岡では、田んぼのあちこちでカエルの姿が見られるようになり、飛び交うホタルの数もずいぶん増えました。さらに、全国、海外の多くの自治体や企業が豊岡を視察に訪れるなど、環境創造型農業への転換は、もはや世界的な潮流になりつつあります。

今後とも、こうした兵庫の取り組みを一層広げていかなければなりません。豊かな自然環境を各地に確保していくことが、本当の野生復帰に向けた一番の近道だと言えます。これからも皆さんと手を携えながら、コウノトリが世界の空を飛びまわる日をめざし、全力で取り組んでいきます。



放鳥10年に寄せて

豊岡市長
中貝 宗治

2005年9月24日、34年ぶりに日本の空をコウノトリが舞いました。あの時のどよめきから、10年が経ちました。日本の野外のコウノトリは、今や80羽を超え、各地へ飛び立っています。国境を越えて韓国に渡り、人々を歓喜させるものまで現れました。さらに今年は、野田市、越前市、韓国でも放鳥がなされました。

半世紀にわたる、様々な分野の、多くの人々の連携した努力の成果です。その人々を、私はとても誇りに思います。

放鳥10周年という記念すべき年に、改めて確認したいことがあります。コウノトリ野生復帰の事業主体は誰か、ということです。まず、コウノトリの郷公園は放鳥主体です。しかし、「=野生復帰の事業主体」ではありません。もちろん、郷公園は野生復帰事業の極めて重要な推進力であり、郷公園なしには野生復帰はありえませんでした。しかし、イコールではありません。なぜか。

コウノトリの野生復帰とは、コウノトリが自然界に定着し、自分でエサを捕り、やがてカップルができ、ヒナが生まれ、生まれたヒナが成長して自らエサを捕り、新たなカップルができ、ヒナが生まれる・・・という状態を安定的に創り出すことです。

そのためには、適切な補給（放鳥）など遺伝的多様性の確保のため

の措置、環境創造型農業の普及、河川等湿地生態系機能の強化、人々の環境意識を高める教育・学習の展開、環境行動自体の持続可能性を高めるための環境経済戦略の実施（環境と経済の共鳴）などが不可欠です。

それは、結局、コウノトリ「も」暮せる環境を創造する、ということの意味します。日本で「里の鳥」と呼ばれるコウノトリの野生復帰は、地域の人々がコウノトリを地域の一員として再び迎え入れる作業そのものです。豊岡の地で進められた野生復帰の事業主体は、様々な市民、団体、企業、国・県・市、研究者、市外からの参加者等からなる豊岡という地域、あるいは地域社会そのものであると言えます。みんなが互いに協力してやってきた。

コウノトリは、「全国へ、そして世界へ」と羽ばたき始めました。コウノトリ自体に着目すれば、それはコウノトリの生息域が広がることを意味します。が、それは「一面の事実」でしかありません。一度野外で絶滅したコウノトリの生息地の展開とは、本質論としても、実践論としても、コウノトリも住める環境の展開に他なりません。

多くの地で、その覚悟と実践が広がることを期待しています。

野生復帰の10年を ふりかえる

＝科学により解明されたコウノトリの事実＝

2005年9月24日に試験放鳥を開始し、10年を迎えた兵庫県立コウノトリの郷公園。ランドデザインに基づいて着実に進みつつあるコウノトリの野生復帰の中で科学的に解明された事実と今後の方向性について解説します。

兵庫県立大学大学院地域資源マネジメント研究科長
兵庫県立コウノトリの郷公園統括研究部長
江崎 保男

但馬地方には長いコウノトリの歴史がある。野外に残った個体を捕獲し、飼育を開始したのは1965年、ちょうど半世紀前のことであるが、1930年代には出石鶴山の茶店に代表されるコウノトリの営巣見物、江戸期には出石藩仙石氏による「瑞鳥」の記載、そして7世紀城崎温泉の伝承(鴻の湯)、という具合で、1400年もの歴史があるということになる。但馬には「コウノトリの文化」が脈々と息づいているのである。

いっぽう、「コウノトリの科学」は10年前、野生復帰と同時に開始された。それを可能にしたのは、個体識別の必須アイテム、足環である。このことにより生態学の片翼をなす「社会学」的側面が飛躍的に解明された。この鳥の配偶システムが堅い絆の一夫一妻であること、社会構造の基本が「つがいのなわば

なる。ここで注目すべきことは、成熟しているにもかかわらず独身でいる雌雄が常時存在している事実である。飼育下では知られていたことだが、コウノトリの雌雄は配偶者を慎重に選ぶ。長年連れ添うのだから当然といえば当然である。野外でも気に入った相手と巡り会うまでは、つがいにならないとみえる。

さて若いフローターたちは、頻繁に但馬の外へ出て行く。10年間の個体数変動をみると、総個体数は年を追ってほぼ直線的に現在の80数羽まで増加してきた。これらを、但馬にとどまっている個体と但馬外の個体にわけると、2013年あたりから前者が50羽前後で頭打ちになる傾向がみえてきた。どうやら豊岡を中心とする但馬地方の収容可能個体数は50羽程度と考えられる。

ランドデザインの中期目標に「但馬地域外に新たな個体群を創設すること」というのがある。どのようにすれば、新たな地に定着させられるのであろうか？答えは「餌と配偶者」である。動物は餌がないと生きられず、配偶者がいなければ子を残せないから、当たり前といえば当たり前である。そこで、現在、我々が描く中期目標達成の戦略は以下ようになる。「コウノトリの飛来→地元の歓迎、農林水産業によるコウノトリ・レストランの整備→コウノトリ飛来確率の増大→地元のさらなる努力→(繰り返し)→コウノトリの定着と繁殖および餌動物を中心とする生物多様性の保全・復元」。陸域の生物多様性が著しく衰退している現在、コウノトリを活用して地域の生物多様性保全を行う。これを「正のスパイラル戦略」と名付けている。



2008年以降、毎年営巣・繁殖し続ける伊豆ペア

り」であること、3歳で繁殖を開始する、つまり成熟すること、その結果、若鳥を中心とする多数のフローターが常時存在すること、その一部は、なわばり内に居候として生活していること、間引きとしての「親による子殺し」が存在すること、などが証明された。また、2011年に策定した「コウノトリ野生復帰ランドデザイン」で予言した「種内闘争の激化」が現実化している。

生態学のもうひとつの翼をなす「経済学」的側面、「個体群研究」も進んだ。野外個体の最年長は17歳のメスであるが、この個体を頂点に雌雄それぞれについての年齢ピラミッドを描いてみると、3歳未満の若者が半数を占め、まさにピラミッド型に

大学院RRMコラム No.1

地域資源マネジメント研究科 (RRM) がスタートしてはや1年半、秋たけなわ。詩人サトウ・ハチローによって、口笛にたとえられたモズの高鳴きがこのキャンパスでも聞こえます。完全肉食のモズたちがなわばりの再配置をおこなっているのです。そして、もうすぐ白い冬、でもRRMの院生たちは元気、元気。頼もしい限りです。来年4月には博士後期の院生たちもこの輪に加わることでしょう。今回から、スタートした新たなコラムです。なにとぞよろしく ～鴻鶴子



松島興治郎さん
1960年、豊岡高校卒。かばん製造会社勤務を経て、65年からコウノトリ専属飼育員として保護増殖に取り組む。99年に県立コウノトリの郷公園飼育長。2002年に定年退職。

第1ケージは、私の出発点

今年放鳥から10年というだけでなく、野外的コウノトリを捕獲し、保護増殖を始めてから50年という節目の年でもあります。当初から飼育に関わってきた元飼育長松島さんにお話を伺いました。

50年前、コウノトリの飼育を始められたころの様子を教えてください。

コウノトリ保護増殖センター（豊岡市野上）の第1ケージが私の飼育の出発点でした。

1965年に最初に捕獲したペアを入れ、私の飼育員としての仕事がスタートしました。

最初は別の方が飼育員として着任されたのですが、私と交代することになりました。とても大事に世話をしていました。メスが6月、そしてオスが12月に相次いで死亡してしまいました。第1ケージは、その中で飛翔することので

きるフライングケージとして作られたのですが、コウノトリにとつては小さすぎたでしょう。その後、うまくいかない日々が続くのですが、1989年、同じ第1ケージで初めて繁殖に成功することになりました。そして、長い間、保護増殖の中心のケージとして大活躍してきました。

コウノトリの世話をする上で、どんなことに気をつけておられましたか。

最初はまるで腫れ物にさわるといって大切に世話をしてきまして、でも、気を遣いすぎてなめられてはいけませんが、荒っぽく扱うのも

よくないことがわかってきました。コウノトリに、勝つても負けてもいけないのです。平常心でコウノトリと付き合うことです。鳥と話しかけながら世話ができる関係が大切ですよ。

多くのコウノトリの中でも特に印象に残っているものはありますか。

試験放鳥の準備を進める中で、「ハチゴロウ」が登場したタイミングは神がかり的で、すごかったと思います。大陸から飛んできた姿は、優雅で、きれいで、見る人みんなが感動しました。環境が大切なことをはっきりと教えてくれました。

「武生（たけふ）」にも感心しました。福井から保護増殖センターに移送したときは、死ぬ一歩手前という様子でした。しかしたくましい生命力で回復し、さらに子孫を残しました。

コウノトリ放鳥から10年を経過し、今、どんな思いでいらっしゃいますか。

最初に思うのは兵庫県知事さん

がコウノトリをととても大切にしてくださいということ。阪本知事さん以降、すべての知事さんが同じ姿勢で対応していただき、コウノトリを助けてくださいました。

もうひとつは、「人」ということで

一人です。世話をすることは非常に孤独です。そんなときには、心の支えが欠かせません。私は幸いにも飼育に携わる中で、多くの方が私を支えてくださいました。

最後にコウノトリの未来に向けてお聞かせください。

コウノトリが飛んでいる姿は美しい。見るものをこころ豊かにして

くれます。瑞鳥、しあわせを運ぶ鳥だと思えます。

そして、私の予想を超え、あつという間に数が増え、全国へ飛んでいつてくれるようになりました。私は生きていく間にこの様子を見られて幸運だったと思います。今はコウノトリの遺伝的多様性を確保するための工夫や努力が欠かせませんが、最終的にはケージをなくし、人とコウノトリとが共生できるような世の中になってほしいです。

（聞き手 自然解説員 三木）

コウノトリの保護増殖とセンターのあゆみ

- 1956年 コウノトリが国の特別天然記念物に指定される。
- 1963年 国がコウノトリ保護増殖のため、人工飼育を決定する。
- 1964年 コウノトリ飼育場（センターの前身）の建設が始まる。
- 1965年 第1ケージが完成する。
野外個体を収容し、保護増殖を開始する。
- 1971年 最後の野生コウノトリを保護するが死亡、国内の野生の個体が絶滅する。
- 1985年 旧ソ連から6羽のコウノトリが送られる。
- 1986年 飼育していた但馬由来の最後のコウノトリが死亡する。
- 1989年 送られた個体からペアができ、待望のひなが誕生する。
- 1992年 飼育場を「コウノトリ保護増殖センター」に改称する。
- 1999年 兵庫県立コウノトリの郷公園が開園する。
- 2002年 コウノトリの飼育数が100羽を超える。
- 2005年 国内初となるコウノトリの放鳥を行う。
- 2010年 第1ケージの修繕が難しくなり、使用を止める。
（実働45年10か月）
- 2015年 保護増殖開始から50年を迎える。



知ろう 学ぼう 郷公園

今回は原点に戻ってコウノトリについて紹介します。

コウノトリの 特徴

どうして 目の周りが赤いのですか？

目の周りが赤いのは、羽毛がなく、赤みがかった皮ふがそのまま見えているためです。目の周り以外にも喉（のど）、そして足にも羽毛がなく、同じように赤い色をしています。その一方で、羽毛のある他の皮ふはこれほど赤くはないのですよ。



食べ物は どんなものが好きですか？

よくドジョウと言われますが、オタマジャクシやバッタなど季節ごとにいろいろないきものを見つけて食べています。ナマズやヘビなど、大きないきものでも器用に丸のみにします。農家の方からは、コウノトリが舞い降りる田んぼの周囲ではヘビが少なくなったという話も聞きますよ。コウノトリが生息するためには、えさとなる多様ないきものが生きていける環境が必要なのです。

コウノトリ【コウノトリ目 コウノトリ科】

英語名：**Oriental White Stork**

学名：**Ciconia boyciana**

翼を広げると2mにもなる大型の鳥です。姿はタンチョウなどのツル類や、アオサギなどのサギ類に似ていますが、色合いや大きさが異なります。

大型の淡水魚をはじめとする水生動物からヘビやバッタのような陸生動物まで、多様なえさをとる肉食の鳥です。

ウンチやおシッコ、 卵はどこから出てくるのですか？

鳥には、ほ乳類の肛門にあたる総排泄腔（そうはいせつこう）という穴があり、そこからウンチもおシッコも同時に出ています。卵も同じ総排泄腔から出てきますよ。

コウノトリのツメは 他の鳥と比べて かわった形をしていませんか？

コウノトリの足の指先には、黒く短いツメがあります。鳥を飼ったことのある人は、不思議に思うかもしれませんね。他の鳥は、するどいかぎツメをしているものが多いなか、コウノトリのツメは人間と同じように平たい形をしています。

コウノトリは 泳げないのですか？

コウノトリの足には小さな水かきがありますが、カモ類のように水に浮かんで泳ぐ姿は見たことがありません。えさを探する場合も、足が届く程度の深さの場所で歩いて探します。小さな水かきは「かんじき」のような役割をすると考えています。

コウノトリを見かけたときは、情報をお寄せください

兵庫県立コウノトリの郷公園

Hyogo Park of the Oriental White Stork

(〒668-0814 兵庫県豊岡市祥雲寺128)

- 電子メール kounotori@stork.u-hyogo.ac.jp
- FAX **0796-23-6538**
- 電話 **0796-23-5666**



コウノトリを
目撃したら、

日時、場所、コウノトリが何をしていたか、何羽いたかなどを発見者（報告者）の連絡先とともにお送りください。

（様式は、兵庫県立コウノトリの郷公園HP「コウノトリ見たよ」にあります）

写真を撮影された場合は、足環が明確であれば、個体識別を行うことも可能です。ご協力よろしく申し上げます。



コウノトリが 赤ちゃんを運んでくるって 本当ですか？

実はそのお話、日本に生息しているコウノトリではなく、ヨーロッパ・アジア・南アフリカに生息するくちばしの赤い「ヨーロッパコウノトリ（別名：シュバシコウ）」（※コウノトリとは別種）にまつわる伝説なのです。しかし、日本のコウノトリも「瑞鳥（ずいちょう）：めでたいことの起こる前兆とされる鳥」として愛されてきた経緯があるんですよ。

INFORMATION !



野生復帰 10 年記念ポスター 「全国へ、そして世界へ」 を作成しました

野生復帰 10 年を越えて全国へ、そして世界へと飛来するコウノトリをPRするポスターを制作しました。
ダウンロード版を郷公園HPにも掲載していますので、ぜひ活用ください。

コウノトリ飛来時の対応パンフレット 「あなたのまちに コウノトリが飛来したら、」 を作成しました

全国の地方自治体職員を対象に、コウノトリが飛来したときの対応について、文化庁・環境省の監修の下、パンフレットにまとめました(A4 全8頁カラー)。



種の保存と 遺伝的管理

Genetical Management
of Storks

[3つの機能] Functions

野生化の 科学と実践

Science/Practice
Adaptive Management

人と自然の 共生の普及啓発

Education

野生復帰 10 年記念ビデオ 「野生復帰 10 年のあゆみ」 を作成しました

平成 17 年 9 月 24 日、コウノトリの初放鳥をおこなってから現在に至るまでの 10 年のあゆみを、貴重な動画と写真で綴りました(全 5 分 21 秒)。郷公園HPに近日中、アップロード予定です。



県立大学大学院
地域資源マネジメント研究科

28年度入学生募集 B 日程

コウノトリについて
学びませんか



- 社会人は土日講義のみ、4 年間で修士号取得
- 4 年制大学卒でなくても資格認定により受験可
- 英語の試験はありません

対象：大学卒業生(見込含む)、社会人・留学生(要件有)

募集期間：H27.11.18~11.29

試験日：H27.12.13(日)

試験会場：豊岡会場、神戸会場から選択

申込・問合せ：同大学豊岡ジョ・コウノトリキャンパス
tel.0796-34-6079(学務課)

詳しくはWEBで www.u-hyogo.ac.jp/rrm

あわじ環境フェスタに 郷公園が出展します!

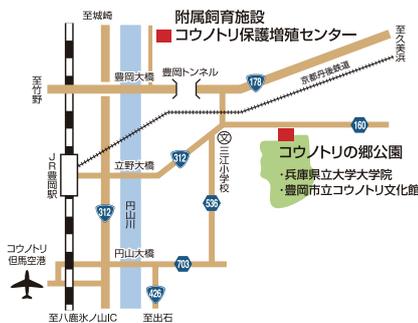
11月14日(土)
15日(日)の2日間
両日も10:00-16:00
淡路ワールドパーク ONOKORO

コウノトリのはく製と記念写真を撮影できるコーナーをはじめ、コウノトリについてやさしく、楽しく学べるイベントを行います。



ACCESS !

- ◎神戸から[約2時間30分]
- 姫路から[約2時間]
- 最寄りIC(北近畿豊岡自動車道)
- 八鹿氷ノ山ICから40分
- ◎JR山陰本線「豊岡駅」から約4.5km
- 全但バス(コウノトリの郷公園・法花寺・下の宮行き)
- ◎コウノトリ但馬空港から約1.2km



編集後記

キコニアレーター第6号は、野生復帰10年記念特別増ページ号としました。初放鳥から10年経過した今、80羽以上のコウノトリが野外で飞翔しています。改めて野生復帰のためにご尽力いただいたすべての方、そしてコウノトリをはじめとしたすべての生き物が住みやすい環境を整えてくださっている皆様のご努力に感謝いたします。コウノトリがさらに大きく羽ばたき、全国へ、そして世界へ、しあわせを運んでくれることを祈っています。

(自然解説員 三木 芳喜)



兵庫県立コウノトリの郷公園

Hyogo Park of the Oriental White Stork

〒668-0814 豊岡市祥雲寺字ニヶ谷128番地
TEL. 0796-23-5666
FAX. 0796-23-6538

e-mail : kounotori@stork.u-hyogo.ac.jp

ホームページ : <http://www.stork.u-hyogo.ac.jp>

開園時間 : 9:00~17:00

休園日 : 毎週月曜日(休日に当たるときはその翌日)・12月28日~1月4日